# 会社も元氣・心も元氣・体も元氣

三宅税理士事務所
所長税理士　三 宅 孝 治
〒710-0803 倉敷市中島2370－14
TEL：086-466-1255
http://www.cms-miyake.info

**3月からは、「京セラ会計学」をご紹介いたします。**

**経営と会計は別々のものではなく、経営の結果を数値で現しているのが会計であり、今後の意思決定をする重要なデータでもあります。経営のすべてを会計数値で表現することはできませんが、会計は、経営を考える上での一つのツールになるのではないでしょうか?**

**経営を行うには、自社の経営の実態を正確に把握した上で、的確な経営判断を下さなければならないが、京セラでは会計について次のような考え方を貫いている。**

「真剣に経営に取り組もうとするなら、経営に関する数字は、全ていかなる操作も加えられない経営の実態をあらわす唯一の真実を示すものでなければならない。損益計算書や貸借対照表のすべての科目と細目の数字も、誰から見ても、ひとつの間違いもない完璧なもの、会社の実態を100パーセント正しくあらわすものでなければならない。なぜなら、これらの数字は、飛行機の操縦席にあるコクピットのメーターの数値に匹敵するものであり、経営を目標にまで正しく到達させるためのインジケーターの役割をはたさなくてはならないからである。」

京セラでは、次のような7つの会計の基本原則をまとめ、それを実践している。

## 1 キャッシュベース経営の原則

「キャッシュベース経営」というのは、「お金の動き」に焦点をあてて、物事の本質に基づいたシンプルな経営を行うことを意味している。経営は儲かった利益がお金として確実に残っているのかが重要で、会計はキャッシュベースで経営をするためのものでなければならないというのが、稲盛氏の会計学の第一の基本原則である。

経営そのものを実際の「キャッシュ」の動きと「利益」とが直結するように近づけていくことを意味している。

## 2 一対一対応の原則

「一対一対応」の原則は、会計処理の方法として厳しく守らなければならないだけではなく、企業とその中で働く人間の行動を律し、内から見ても外から見ても不正のないガラス張りの経営を実現するために重要な役割を担うものである。要するに、経営活動において、必ず動くモノ又はお金と伝票が、必ず一対一の対応を保たなければならず、モノやお金が動けば、同時に必ず伝票が動くこととし、伝票操作や数字の操作はできないことを意味している。

次回は、7つの京セラ会計学のうち、3～7をご紹介致します。今回ご紹介の内容も含めて厳しい考え方かもしれないけど、経営を行う上で大切なことではないでしょうか。できることから実践されてはいかがでしょうか。

参考文献:稲盛和夫『稲盛和夫の実学―経営と会計』
日本経済新聞社、1997年。